



TITLE:

戦後国際政治思想としての日本的
現実主義の原点と台頭：敗戦から
日中国交正常化まで（1945-
1972）（Abstract_要旨）

AUTHOR(S):

張, 帆

CITATION:

張, 帆. 戦後国際政治思想としての日本的現実主義の原点と台頭：敗戦
から日中国交正常化まで（1945-1972）. 京都大学, 2019, 博士(法学)

ISSUE DATE:

2019-03-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k21516>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（ 法 学 ）	氏名	張 帆
論文題目	戦後国際政治思想としての日本的現実主義の原点と台頭：敗戦から日中国交正常化まで（1945- 1972）		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、敗戦から日中国交正常化までの日本における現実主義を国際政治思想として理解し、その時代背景、問題意識、主要内容、特徴と位置づけを包括的に検討する研究である。</p> <p>本論文は七章で構成される。序章では研究背景と先行研究の評価を踏まえた研究手法を説明する。本論文は、近年の非西洋型国際関係論への関心を背景として、戦後日本の「現実主義」を国際政治思想として分析対象とする。ここで「現実主義」は欧米の「リアリズム」と区別される日本の思想を指す用語である。先行研究が六〇年代の高坂正堯ら「現実主義者」に焦点をあて、その展開過程や「リアリズム」との比較検討が不十分であることを踏まえ、本論文は安保改定以前を日本的現実主義の「黎明期」、安保改定から日中国交正常化までを日本的現実主義の「台頭期」と位置づけ、主に論壇誌に掲載された論文を対象として主に思想史的手法を用い、日本的現実主義の主要内容と時代背景を分析する。</p> <p>第一章と第二章では、「黎明期」（1945-1960）の日本的現実主義を検討する。第一章は敗戦から五〇年代半ばまで（1945-1955）の日本的現実主義について考察する。当時の論壇で行われた「保守派」と「進歩派」の間の外交論争について、特に小泉信三、福田恆存、林健太郎ら「保守派」の主張を解明する。「平和問題談話会」に代表される「進歩派」が「保守派」の議論を「現実主義」として非難して「現実主義」に否定的イメージを与えたが、「保守派」は（1）権力政治の重視、（2）共産主義への警戒、（3）「進歩派」の独善と二分法的思惟への不満を問題意識としており、日本的現実主義の「黎明期」を形成した。</p> <p>第二章では、五〇年代後半の日本的現実主義を考察対象とする。この時期には安保改定と中国問題をめぐって、「進歩派」と「保守派」の外交論争が再燃した。「進歩派」が日本の中立化と「中国問題対安保改定」という二分法的思惟を掲げたのに対し、「保守派」は新安保条約への支持を表明し、安保改定と中国問題の両立が可能であると主張した。その一方で、とりわけ「進歩派」が「積極的中立主義」を掲げてより現実的な安全保障政策を提案したことで、「進歩派」と「保守派」の間に一定の共通理解も生まれた。にもかかわらず、安保闘争の激化によって、外交論争は不毛なままに終わった。</p> <p>第三章と第四章では、「台頭期」（1960-1972）の日本的現実主義を検討する。第三章は該当期の日本的現実主義の基本理念を考察する。安保改定後、高坂ら「現実主義者」が論壇に登場し、従来の「現実主義」像を更新した。新しい「現実主義」像（「新現実主義」の基本理念）は権力政治と価値の両立を認め、軍事力とともに非軍事的な力をパワーの構成要素として捉え、勢力均衡を前提に平和を漸進的に実現する</p>			

ことを主張した。高坂ら「現実主義者」は小泉ら「保守派」の問題意識を部分的に受け継ぎながら、非軍事的な力と価値の役割をも重視し、「進歩派」とも対話することで従来の外交論争を超克しようとした。しかし「進歩派」は論壇で「新現実主義」批判を展開し、「現実主義者」と「進歩派」の対話は失敗した。

第四章では、「台頭期」の日本的現実主義の外交政策論を考察する。「現実主義者」は「進歩派」と同様に、自主外交と非核武装、日中復交を提唱した。しかし、両者の外交政策論の内容は大きく異なっていた。「進歩派」が日本の中立化と原水爆の無条件的否定、感情的・イデオロギー的な中国観を主張したのに対し、「現実主義者」は日米安保の堅持と世論の力の重視、権力政治的な中国観を主張した。

第五章では、西洋型国際関係論の古典的リアリズム (Classical Realism) との比較分析によって、日本的現実主義の特徴と位置づけを指摘し、その「日本的」性格を解明する。まず、カー (E. H. Carr)、モーゲンソー (Hans Morgenthau)、ケナン (George Kennan)、キッシンジャー (Henry Kissinger) の国際政治思想を検討することで古典的リアリズムの特徴を明らかにする。次に、「黎明期」の日本的現実主義について、(1) 非軍事的な力と価値の軽視、(2) 反共主義、(3) 「日本的」課題としての「進歩派」との対抗、講和と再軍備、日米安保という外交課題の解決、という特徴を持っていたこと、「台頭期」の日本的現実主義は、古典的リアリズムを受容しながらも、(1) 非軍事的な力の重視、(2) 「経済大国」化という「日本的」経験と、従来の外交論争の超克や「吉田路線」の調整といった課題に取り組むことで発展を遂げた。全体として日本的現実主義は主体性を保つことに成功し、オリジナリティをもつ日本的国際政治思想となったのであり、国際政治学／国際関係論 (IR) の知的遺産として、この時期の日本的現実主義は重要性をもつ。

終章では、論文全体を総括し、日本的現実主義がもたらす示唆を整理した上で、将来に向けた課題として、日中国交正常化以降の日本的現実主義の検討の必要性を指摘して論文が結ばれる。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、1945年の敗戦から1972年の日中国交回復までの期間において、主に雑誌論壇で提示された日本外交論から「日本的現実主義」の系譜を見出し、その歴史的展開と主張内容を明らかにする研究である。

1960年代に登場した高坂正堯や永井陽之助といった現実主義国際政治学者に関する研究は近年急速に厚みを増しているが、彼らの主張をより長期の文脈に位置づけ、また、一つのまとまった国際政治思想として国際的な比較の対象とする探求はこれまで十分に試みられてこなかった。この点で本論文は日本の国際政治学史研究に独創的な知見を加える研究と評価できる。

本論文の特に評価すべき第一点として、1950年代の「進歩派」と「保守派」の論争を60年代の現実主義の先駆をなす議論として丁寧に分析した点が挙げられる。福田恆存、小泉信三らによる丸山眞男らの外交論批判を黎明期の日本的現実主義と位置づけ、また、50年代末の安保改定論争期にみられた、現実主義的思考と共鳴する一部進歩派の主張の存在を明確にした点は本論文の功績といえることができる。

第二の特徴として、本論文が台頭期の日本的現実主義と定義する60年代の現実主義外交論に関して、自主外交、非核保有、日中国交といった主要論点に区分し、彼らと進歩派の外交論の異同を整理し、日本的現実主義に関する精密な分析を提示している点が指摘できる。

第三に本論文は、同時代の欧米のいわゆる古典的リアリストとの比較や、近年の中国のリアリスト国際政治論を参照することで、日本の現実主義者の国際的な特徴を明確化することに一定程度成功している。この視角からの分析は体系的に完成されているとは言えないものの、従来軽視されてきた、日本の国際政治思想を国際比較の俎上に載せる分析を試みた点は高く評価できる。

もちろん本論文に問題がないわけではない。60年代の現実主義者の主張についてよく整理されているとはいえ、本論文が先行研究を越える独創的な知見を提示しているとはいいがたい。また、日本的現実主義を一体的な思想と扱うことに対しては依然として留保の余地があるし、主張者間の知的、社会的相互作用といった側面についても更に実証的に探求する余地がある。とはいえこれらの点は、今後研究を更に進展させる上で解決すべき課題と見なされるべきであり、本論文の学術上の価値をいささかも損なうものではなく、本論文が日本の国際政治思想研究にもたらした意義は明らかである。

以上の理由により、本論文は博士（法学）の学位を授与するに相応しいものであり、かつ、学界の発展に資するところが大きく、特に優れた研究であると認められる。

また、平成31年1月24日に調査委員3名が論文内容とそれに関連した試問を行った結果合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認め

る。